

## Robert Penn Warren, *Promises* における 自伝的要素と “Time” の概念について

香ノ木 隆臣

### 1. Warren の文学における Time の概念の成立

1958 年に全米図書賞とピューリッツァー賞を受賞した、Robert Penn Warren (1905-89) の詩集 *Promises* (1957) は、その形式も内容もそれまでの彼の作風から一変しており、60 年近くにわたる彼の詩作の系譜のなかで、大きな転回点と位置づけられる作品である。定型詩の形式に基づいた暗鬱な内容の初期の詩作とは対照的に、Warren は、この詩集で物語性の強い自由詩のスタイルを採用し、さらに、自伝的要素を積極的に取り入れ、全体として肯定的なヴィジョンを打ち出している。この詩集に収められた 24 の詩は、主題や時間軸がゆるやかな連関をもって配列され、ひとつの秩序を形成している。特に注目されるのは、自伝的経験を核にしつつも単なる個人の感情の発露を超えた “Time” という普遍的概念を確立しようとした彼の試みである。Warren の思索の系譜における *Promises* の意義とは、個人の人生という小文字の time というべき時間における経験に、大文字の “Time” として抽象化・普遍化されうる意義があるという信念を多面的かつ真正面から考察したという点にある。しかし、Warren は中後期の詩集で “Time” をめぐる思考を展開し続けたにもかかわらず、その意義を体系的にまとめた考察は、現在のところ存在しないようである。<sup>1</sup>

Warren の文学作品において、大文字の “Time” が現れるもっとも印象的な場面は、彼の代表作である長篇小説 *All the King's Men* の最終パラグラフである。

...the needles thick on the ground will deaden the footfall so that we shall move among the trees as soundlessly as smoke. But that will be

a long time from now, and soon now we shall go out of the house and go into the convulsion of the world, out of history into history and the awful responsibility of Time. (*King's* 464)

「煙のように音もなく」歩くという超越した状態に達する前に、「激動」と「責任」に満ちた現世を集約する概念として“Time”が提示され、そこへ立ち向かう主人公の静かな決意が描き出されている。だが、この小説を読むだけでは“Time”が具体的に何を意味するのか判然としない。

“Time”という概念を探るにあたり参考になるのは、*Promises* の直前に出版された長篇物語詩 *Brother to Dragons* の序文で Warren が語った、“[h]istorical sense and poetic sense should not, in the end, be contradictory, for, if poetry is the little myth we make, history is the big myth we live, and in our living, constantly remake.” (*Brother* xiii) という一節である。詩を現実から隔離したニュー・クリティックとしての彼のイメージとは逆に、詩は歴史の縮図であり、絶えずその意味を考え直し続ける重要性を、Warren は強調している。Thomas Jefferson や彼にかかわる周縁的人物と Warren のペルソナ R.P.W.が時空を超えて対話を繰り広げる *Brother to Dragons* において明らかにされた彼にとっての歴史は、現実において死者の存在を認識する、自己と死者との積極的交感というべき精神的作用の比喩に他ならなかった。その背後にあるのは、「アメリカ的無時間」と形容できる楽観主義への Warren の一貫した批判である。過去とは必然的に膨大な死者を内包する以上、文学は歴史の縮図であるとする彼にとって、死の概念との肯定的一体感の追究が根本のテーマとなったのは当然であろう。Warren にとって、生身の人間が辿る有限の人生という時間とは、“Time”として普遍化する意義を蔵していたのである。

*Promises* は大きく 2 部に分かれ、「廃墟となった砦にて、一歳の女の子に捧げる」という標題のもとで長女 Rosanna に捧げた 5 篇の詩と、「約束」と題された長男 Gabriel に捧げた 19 篇の詩という構成になっている。<sup>2</sup> Warren はこの詩集に収められた作品が書かれていた頃、1951年に最初の妻と離婚し、1952年に再婚する。そして1953年に長女 Rosanna、1955年に長男 Gabriel が生まれる。こうした個人的経験が

*Promises* に直接に反映されたものであることが “joy” という単語が多用されることによく示されていると、批評でよく指摘されるところである。<sup>3</sup> とはいえ、この詩集は自身の幸福な私生活に触発された昂揚感に彩られた肯定的ヴィジョンを描き出す作品でありながらも、必ずしも明るい側面ばかりがうたわれているわけではない。Warren はこの詩集の執筆当時の苦しい精神状態を語っている。

I remember the time. There was a time in the middle of the forties and for the next ten years almost when I couldn't finish a poem. I started and I'd do three lines of one. Then another few lines—of another I could never finish. Then for some years we lived, in the summers, in a ruined sixteenth-century fortress on the Mediterranean, and it was an Eden—but an Eden with a bloody history of centuries. Everybody needs an Eden—at least once—but a special kind of complex Eden. Anyway, I began to finish my poems, for the first time in ten years. (Watkins, *Talking* 219)

自身が重大な転機にさしかかっているという自覚がこの詩集を手掛けていた時期の Warren にあったのは、この発言からして間違いないだろう。折からマキアヴェリ研究のためイタリアに滞在していた彼にとって、空間と時間の内的変容の経験が、存在の連続性の感覚にめざめる契機となったことが、この発言にうかがわれる。特に注目すべきこととして、血塗られた歴史を秘める廃墟が、「誰もがエデンを必要とするが、それは複雑なエデンという特殊なものである」と、人間の理想の暗黒面の意義を探ることと結びつけられてこの詩集の出発点と位置づけられている。*Promises* はその構想の段階から、歴史と人間性のかかわりの探究が原点にあったのである。

## 2. 長女 Rosanna に捧げられた詩群—連鎖の感覚—

長女 Rosanna に捧げられた詩 5 篇は、イタリアの海辺の断崖にある現在は廃墟となった中世の城砦に娘を連れてきたときの情景を背景とし、海を渡る風シロッコが、廃墟となった城と、幼い娘とを結びつけている点は、連続性への志向がこの詩集の中心主題であることを、作者が冒頭の詩 “Sirocco” で物語っているという意味で注目に値する

(“Sun blaze and cloud tatter, it is the sirocco, the dust swirl is swirled / Over the bay face, mounts air like gold gauze whirled; it traverses the blaze-blue of water, / We have brought you where geometry of a military rigor survives its own ruined world,” (CP103)<sup>4</sup>). 北アフリカから地中海をわたってイタリアに吹きつける風シロッコは、空間の連鎖を表す存在として冒頭で強調される。「戦いの痕跡が幾何学模様のように鮮やかに刻印された廃墟」と過去の戦争が明示され、廃墟で遊ぶ子供という情景が、時間の連続性を宣言する。個人の背後に存在する空間と歴史の連続性は、娘を連れてきた主語の “We” を読者一般と解すれば、自伝性を超えた普遍的要素を秘めていることもわかるだろう。

“The Flower”では、丘に咲き誇る花を手にしようと、語り手の腕のなかでもがく娘の描写がなされたのち、季節がうつろうにつれて色あせる庭園に視線が移る。ここでの庭園は時間を秩序づけようとする人間の営為の比喩とも言えるだろう。語り手は、時間の経過を主体的にとらえ直す企てを、“Let” で始まる文を重ねることで読者に伝えている。このスタンザで、大文字の “Time” がこの詩集で初めて言及される。

Let all seasons pace their power,  
As this has paced to this hour.  
Let season and season devise  
Their possibilities.  
Let the future reassess  
All past joy, and past distress,  
Till we know Time’s deep intent,  
And the last integument  
Of the past shall be rent  
To show how all things bent  
Their energies to that hour  
When you first demanded your flower. (CP 106)

「時の深い意図を私たちが知るまで、未来に過去の喜びや悲しみを見直させる」という言辭は、「(過去から見て未来にあたる) 現在という視点から過去の出来事の意味を考え直せば、時の意味を把握することができる」ということである。季節の移り変わりによって過去のものになった、単なる事実を見るのではなく、事実蓄積された過去をい

かに解釈し意味を紡ぎだすかという、関連性を重視する物語的行為の意義が語られている。それは、「過去が全力で、幼い娘が初めて花を求めた行為に手を貸している」として、語り手は目の前の事象の背後にある過去の層の厚みに読者の注意を促す。子どもが花へと手を伸ばす行為を主体的探究の比喩ととらえれば、“Time” が主体性の確立に不可欠であることがこの詩で宣言されているといえるだろう。

連鎖の感覚の重要性を説く Warren の意思是、“Colder Fire” で繰り返される。雨の日に自分の膝の上で遊ぶ娘をあやしながら、霧が葉に集まりしずくとなって滴る (“Mist threads in silence the darkness of boughs, and in that shade / Condensed moisture gathers at needle-tip. It glitters, will fall.” (CP 108)) ように、ひとつの考えを娘に伝えようとする。この行に続くスタンザでそのイメージが「記憶の連関」と言い換えられて、時間的要素がさらに前景化されている。

I cannot interpret for you this collocation  
Of memories. You will live your own life, and contrive  
The language of your own heart, but let that conversation,  
In the last analysis, be always of whatever truth you would live.  
(CP 108)

「あの会話」は「記憶の連関」を指しているとすれば、父から子へと伝えられる価値観の比喩となり、それを自分の力で解釈していく大切さを教えようとしている語り手の意思是、「つながり」と「会話」、「考案する」と「生きる」とが行末の押韻で関連づけられている表現にうかがわれる。とはいえ、こうした伝承の構図の困難さは、「冷たい炎」「音のない声」というオクシモロンを使い描出されている。これは単なる技巧ではなく、不可能を可能にしようとする詩的な試みと解釈したい。

For fire flames but in the heart of a colder fire.  
All voice is but echo caught from a soundless voice.  
Height is not deprivation of valley, nor defect of desire,  
But defines, for the fortunate, that joy in which all joys should rejoice.  
(CP 108)

ここに見られる矛盾した論理は、無と思われるもののなかに遍く存在

する喜びを追求する価値を告げている。未来ある Rosanna に捧げた前半の詩篇を結ぶこの詩で、父親である Warren 自身が人生の大きな変化を契機に、新たなる秩序の模索を宣言する決意をうたっていると言えるだろう。これを“Time” とのかかわりで考えてみると、従来の作品では好んで自身の過去を題材としていた彼であったが、自分の子供をもつという体験が未来への希望に関心を向かわせる要素となり、時間の連続性をいっそう切実に、しかも肯定的に認識するようになったのではないだろうか。この詩集の出版の2年前、Warren は盟友 Allen Tate に宛てた書簡で、自身の人生観を語っている。

Man is capable of great vileness, sure, but he is equally capable of the opposite—but not so, ultimately, unless he can face up to the depravity and make something of it. Etc. I’m tired of being told by some reviewers that I take a pessimistic view of human nature. I think I take a very optimistic view. I think it is capable of total redemption as well as total depravity. But redemption takes a little work. (Hendricks 52)

「贖罪」ないし「救い」を得るために「ちょっとした仕事」が必要であるとは、彼にとって、何らかの困難な人生の課題の克服が、肯定的な人生観を獲得するために必須であったということである。具体的には、離婚・再婚といった人生の大きな変化を指しているだろう。この後、子供が生まれたことで彼は未来にもさらなる関心をもつようになり、“Time” の概念を自伝的要素と関係づけることでその有機的性格を追求していくことになったのではないだろうか。

### 3. 長男 Gabriel に捧げられた詩群(1)—過去の事件の意義—

Gabriel に捧げられた 19 篇の詩群は、息子への呼びかけを中心に、Warren 自身の過去や祖先にまつわる思い出、そして事件の描写やアメリカ史上の人物への言及など、多岐にわたる内容が扱われている。娘に捧げた詩は明るい色調で統一されていると言ってよいが、後半では、そうしたヴィジョンに到達するまでの内的プロセスをたどり直している。これらの詩の特徴は、“depravity” というべき状況に陥った人間模様を再現し、そこから意味を抽出して子供に伝えようとする Warren の

視点が明確にされている点にある。端的に言えば「死」を認識することの重要性が、繰り返し詩化される。“Time” は人間に有限性を自覚させ、個人に現世の意義を自覚させる概念として有機的に描き出されるのである。最初の詩、“What Was the Promise That Smiled from the Maples at Evening?” は、「あの約束は何だったか」という出だしのリフレインが4回繰り返される。それらの問いに共通しているのは、“the last light had died” “the dying was done” (CP 109) に象徴される、現在は失われたもの、さらに言えば死の意味を探求するという命題である。それに対して、Warren の祖父母が死後になって現在の自分に語りかけてくるという手法で、“We died only that every promise might be fulfilled.” (CP 110) という回答が読者に伝えられる。ここには、「約束」が未来にかかわるだけでなく、過去にも関係するという死を介した時間軸の明確な認識がある。自明と思われた現在の情景の背後に超越的な存在があることを直感した語り手が、新しい現実認識の探究に詩的関心を寄せ始めた姿が表れている。

死者の存在を自らの生きる現世のなかに関心することが、“Time” が生者に及ぼす衝撃であることを端的に伝えるのは、“Court-Martial” である。語り手が幼かった頃、南軍側に従軍した祖父から聞かされた、北軍兵士を絞首刑に処した話を聞いたときの衝撃がうたわれ、過去の衝撃は現在に続いていることを知った心の動きをこの詩は追っている。彼自身は、書簡のなかでこの詩について “a reconstructed recollection” であると言及し、この詩の主題を “the discovery of some shock of human reality and pathos behind the façade of history” (Hendricks, 305) と述べていることから、大きな歴史の背後にある個人の精神の重要性に読者の注意を促そうとする Warren の意図は明らかといえるだろう。

子どもの頃の語り手は、短い行の連続に示されるように、過去を断片的にしかとらえられなかったと告白している点がまず注目される。

I sought, somehow, to untie  
The knot of History,  
For in our shade I knew  
That only the Truth is true,  
That life is only the act

To transfigure all fact,  
 And life is only a story  
 And death is only the glory  
 Of the telling of the story,  
 And the *done* and the *to-be-done*  
 In that timelessness were one,  
 Beyond the poor *being done*. (CP 111)

当時の語り手は、歴史を繙くことで得られる抽象的眞実のみが正しいと信じ、「人生とはあらゆる事実を歪曲するにすぎない」「あわれなる現在を超えて、過去と未来は時間のないなかではひとつである」と告白する。彼は現実感を欠いた精神的空白のなかに生きていたのである。しかし、祖父の話聞いて、語り手は処刑された敵兵の死後の姿を幻視し、祖父が無言のうちに自分に近づいてくる姿を彼は意識するようになる。

The horseman does not look back.  
 Blank-eyed, he continues his track,  
 Riding toward me there,  
 Through the darkening air.

The world is real. It is there. (CP 113)

語り手が「暗くなっていく大気のなかを、うつろな目をして自分の方に決然として向かってくる」と祖父の姿を思い描くのは、自身の人生も暗闇のなかへ憂鬱さを抱えながら進んでいくことになるという、現実への開眼の表明に他ならない。「世界は現実のものである。そこにあるのだ」という独立した1行で、その思いが宣言されている。祖父から聞かされた南北戦争の情景が、生々しい現実感をもって自分に刻み込まれたと Warren 自身がしばしば言及している思い出 (Watkins, *Talking* 124) が、この詩に直接に反映されているのである。祖父がかつて敵兵の処刑をしていた事実を知ったことで現実感を得る構図は、単なるノスタルジーと片づけられがちな回想が、実際には後年にまで影響を与える時間的継続性をもつ認識を読者に伝える。その核になるのは、語り手の想像した、兵士の死であったのである。

死が自己確立に及ぼす重大な意味を、後年になって把握する内的経



験をさらに具体的に扱ったのが “Country Burying (1919)” である。語り手は、子供の頃に母に連れられて葬儀に行き、式が終わるのを教会の外で退屈しながら待っていた。しかし、今からすれば、自分もまた死すべき存在であることを、その葬儀から教えられたという意味があったと理解できたのである。語り手は現在の時点から当時の出来事をとらえ直し、亡き母を身近に感じつつ、ある目的が満たされることを予感しながら今の人生を歩んでいることが比喩的に示される。その陰にあったのは、死者の存在であり、自分のまたその一人となることを彼は肯う。

And we, too, now go, down the road, where it goes,  
My mother and I, the hole now filled.  
Light levels in fields now, dusk crouches in hedgerows,  
As we pass from what is, toward what will be, fulfilled,

And I passed toward voices and the foreign faces,  
Knew dawn in strange rooms, and the heart gropes for center,  
But should I come back, and come back where that place is,  
Oak grove, white church, in day-glare a daze, I might enter.  
(CP 117)

「声や見知らぬ顔の方に向かって通り越す」とは人生のさまざまな経験を指すだろう。しかし、その後には「教会に帰ることになるはず」とあるように、歳月を経た後の語り手は、死との一体感を受け入れて他者との一体感に達したと言ってよいだろう。“Time” が人間どうしの連鎖の核となっていることを感得した内的経験を述懐するこの詩は、死者が媒介となった時間軸の連鎖を扱っているのである。この連関は、“School Lesson Based on Word of Tragic Death of Entire Gillum Family”でも言及されている。Warren自身が小学校に通っていた当時、同じ学校の児童の父親が自らの一家全員をアイスピックで刺殺したという実際に起きた陰惨な事件に基づいた作品である。子供であったがために当時は意味が分からず、その知らせがあった日もいつもと同じように勉強をしていた語り手は、後になって事件の意味を理解する。この認識の構図は先の詩を踏襲している。

Studying the arithmetic of losses,  
 To be prepared when the next one,  
 By fire, flood, foe, cancer, thrombosis,  
 Or Time's slow malediction, came to be undone.

*We studied all afternoon, till getting on to sun.  
 There was another lesson, but we were too young to take up that one.  
 (CP 119)*

ここで、“Time”が否定的に言及されている点は興味深い。災害や外敵、病気と並列させて、「時のゆるやかな呪い」が展開するのに備えて勉強していた、と一度は“Time”を否定的文脈に置きながらも、その後で、「別の教訓があつて、幼すぎてそれを取り上げることもできなかった」と、それらの否定的要素には、実は重要な教訓を自分に教える意義があつたと念押しする役割が与えられているからである。“Time”の破壊力は、あらゆる人間に有限性を自覚させる意味をもつことが、Father Timeの持つ大鎌を連想させる凶器で示される。また、事物が数学のように論理的に関連しているとは限らない、不条理な現実にも語り手は目を向けている。結びの「もうひとつの教訓」の具体的内容は判然としないものの、一見すると破壊的な“Time”とは、自身の存在する前に連なる膨大な死者を知るための契機となる可能性を、この事件が語り手に教えたことを指すのは、間違いないといえるだろう。

人間のなかに潜む過去という概念を広い文脈に拡大させて考察した“Founding Fathers, Nineteenth-Century Style, Southeast U.S.A.”では、アメリカの建国者たちの欠点に言及しつつも、彼らの理想に立ち返り現実をとらえ直すことに読者の注意をうながしている。ここでWarrenは、かつての理想から乖離した現在のアメリカへの批判を繰り広げていることは明らかであるが、この詩集の主題の流れに位置づけてみれば、過去と現在を結びつける時間の連続性を訴えかけていると解釈できる。

And died, and they died, and are dead, and now their voices  
 Come thin, like last cricket in frost-dark, in grass lost,  
 With nothing to tell us for our complexity of choices,  
 But beg us only one word to justify their own old life-cost.

So let us bend ear to them in this hour of lateness,  
And what they are trying to say, try to understand,  
And try to forgive them their defects, even their greatness,  
For we are their children in the light of humanness, and under the  
shadow of God's closing hand. (CP 121)

複雑化した現在の社会に、建国の父祖の唱えた理想は意味をなさないと思えるかもしれない。しかし、彼らの過去の声は、決して過去のままで完結するのではなく、「人間性」という価値観に照らせば、私たちは建国の父祖の子供であり、私たちは「神の閉じる手の影の下」にいるという、人間の認識を超える神秘的なつながりにより、現在の私たちは抽象化された建国の父祖と結びついていることが、表現においても明確にされている。これまで見てきたように、死者との交感が “Time” を支えてはいるが、この詩に明らかなように、それは霊的な共同体を介して他者との一体感を求める神秘的志向があることは、注意されてよいだろう。

時間軸を基にしたつながりをうたった詩に続き、“Foreign Shore, Old Woman, Slaughter of Octopus” という一風変わったタイトルの詩では、人間の残酷な一面が前景化される。イタリアのとある海辺にいる語り手の目の前で、岩場にいたタコを子供たちがナイフで殺してばらばらにする。海辺を散歩していた老女はその場にたまたま居合わせることになる。語り手はこうした一連の情景を目にして思いを巡らせる。語り手にとって、タコや子供たちは、すべて海辺での出来事としてひとまとめにされ、老女と自然とが対比される。語り手はこの老女の心中を察し、そこから得られた思いを読者に伝える。

This is not my country, or tongue,  
And my age not the old woman's age, or sea-age.  
I shall go on my errand, and that before long,  
And leave much, but not, sea-darkling, her image,  
Which in the day traffic, or as I stand in night dark, may assuage  
The mind's pain of logic somewhat, or the heart's rage.  
(CP 122)

語り手は、この詩の背景が外国であることを強調し、かつ自分と女性が年齢的にもかけ離れているとも言う。そして、ここで語り手が述べ

る “leave much” とは、「多くのもので残して去る」という意味で、自分の死を暗示しているだろう。それでも「暗い海」と結びつけられた「彼女のイメージはそうではない」としていることから、この老女は大海のごとき一般化された存在となって、語り手の死後もこの世に存在し続けるという、他者との精神的連関の永続性という “Time” の性質について語り手は瞑想しているといえるだろう。Warren はタコを殺す子供たちの行為を、剥き出しの人間性の残酷さの象徴にとらえ、人間の本質を見せつけるシーンを目撃した老女の心中を推し量りつつ、それに耐える彼女を讃えている。「彼女のイメージが、論理という理性の痛みと、感情の怒りを緩和する」とまとめられていることから、“School Lesson” の詩と同様、不条理で残酷な死を遂げた者の存在を受けとめ、それが “Time” の意味を知る契機になりうることを、この詩は読者に伝えているだろう。

“Dark Night of” においても、「外国の海辺」での否定的な要素の重要性を認識した契機となった出来事を、語り手は回想する。彼が 12 歳の頃のある夜、自分の家の庭に身を隠していた不審な男の様子をうかがいに行ったときの緊張が描写される。この男は、“Foreign Shore” のタコに似て、物陰に隠れて目だけが光っているという描かれ方である。語り手に声をかけられたこの男は立ち上がって悠然とその場を離れていく。その姿に彼は羨望をおぼえたことを告白する。ここで動詞の時制が現在形に切り替わるのは (“Moved under the light-dizzy sky. / Far off, he is pin-prick size,” (CP 123))、当時の感情を現在において再現し、対象を自己のなかに取り込んでその意味を考え直す語り手の思いの反映と解釈できる。最終スタンザでは意図的に単調な脚韻が繰り返され、確固とした構成を印象づけるような効果が生じているだろう。

His head, in the dark air,  
 Gleams with the absolute and glacial purity of despair.  
 His head, unbarred, moves with the unremitting glory of stars high in  
 the night heaven there.  
 He moves in joy past contumely of stars or insolent indifference of the  
 dark air.  
 May we all at last enter into that awfulness of joy he has found there.  
 (CP 125)

明らかに、去っていく男の姿に現在の語り手はあこがれを感じている。「輝く」「そこにある夜の天国に絶え間なく輝く星」といった、不審者に対しては似つかわしくない称揚の言葉が用いられ、宗教的な雰囲気すら漂っているからである。現在の語り手は、この男の姿に人間の原型的イメージを感じ取っているようでもある。この一件の与えた衝撃は、この詩のタイトルが当初は “Dark Night of the Soul” であったことに示されるように、語り手にとって精神の深奥にまで達する衝撃力をもつものであった。「喜び」には「畏怖」という属性があることを示す “enter into that awfulness of joy” という表現に、*All the King's Men* の結び “go into the awful responsibility of Time” との関連を読み取ることができ、“Time” の意味を解明する上で注目される。語り手は、自身の過去の経験を現在に重ね合わせたうえで、男が感じたかもしれない「喜び」を「私たち」という人称に拡大して一般化し、語り手個人の内部で再現された過去が、悪を核にして他者との共通点を模索する方向に展開し、時間と人間同士の交感が打ち出されているからである。

#### 4. 長男 Gabriel に捧げられた詩群(2)—未来への希望—

*Promises* は結びにかけて、息子 Gabriel に対する呼びかけという性格を強め、過去に題材を求めていた “Time” をめぐる思考が、未来へとつなげられる試みが明らかにされている。「喜び」への祈りで閉じられた “Dark Night of” での思いは、続く “Infant Boy at Midcentury” でいったん保留される。この詩では、息子 Gabriel をモデルにした乳児に向けて、1950年代という時代をきわめて批判的にとらえながらも、時間軸が現在から未来へと延長される。背景をまさに同時代に設定することで、より現実性のある社会批判の色彩が濃くなっている。3部に分かれたこの詩で、語り手はまず “When the Century Dragged” で1950年代の思想的同化を強いられた風潮を強く批判する (“You come in the year when promises are broken, / . . . / When the young expect little, and the old endure total recall, / But discover no logic to justify what they had taken, or forsaken.” (CP 126))。しかし、“Modification of Landscape” で、タイトルが示すように、そうした風潮はいつか変化するという希望が

うたわれる。語り手は、現実には探求すべき隠れた真実があると息子に語りかけ(“there’s natural distress / In learning to face Truth’s glare-glory, from which our eyes are long hid.” (CP 126))、そして“Brightness of Distance”で、子供には先の世代から希望に満ちた視線が注がれ(“And think, as you move past our age that grudges and grieves, / How eyes, purged of envy, will follow your sunlit chance.” (CP 127))、世代の交代を暗示する表現で結ばれる(“From privacy of fate, eyes will follow, as though from the shadow of leaves.” (CP 127))。「木の葉の影」とは、落ちてはまた生まれ変わる木々の葉にたとえられた人間の生命の循環を示唆し、死者を介しての他者との精神的連関がここにも詩化されているといえよう。

「死と再生」という古典的モチーフに基づいて「眠り」が前景化される“Lullaby: Smile in Sleep”では、現実社会にいかに対峙するかという問いの流れを受け継ぎ、眠りにつく子供にとっては夢が現実にならず、理想を持ち続ける大切さが、眠っている子供への語りかけという枠組みのなかで、夢(つまり理想)の重要性を読み手に伝える効果が生まれている。ここでの「眠り」が、夜に現れて満ち欠けを繰り返す「月」と関連づけられるのは、端的に言ってクリシェである。しかし、「月」のそうした一般的象徴性が導入されることにより、自分の子供への呼びかけという自伝性が普遍性を獲得するに至り、“Time”という生者と死者の神秘的連鎖が具体性をもって描き出される効果を生んでいるといえよう。しかし、「夢を指揮する冷たい月に向かって、外界が攻撃を仕掛ける」という認識も同時に提示されている。外界の描写にはあからさまに野性的なイメージが込められており、逆に、ここで子供が夢見る現実のもつ理性が浮き彫りにされる。

There’s never need to fear  
Violence of the poor world’s abstract storm.  
For you now dream Reality.  
Matter groans to touch your hand.  
Matter now lifts like the sea  
Toward that cold moon that is your dream’s command. (CP 128)

理想を象徴する月が子供を支配するという意味は、続く“Man in

“Moonlight” でさらに検討が重ねられている。3 部に分かれたこの作品では、満ち欠けを繰り返す月は過去と現在という時間を相互に接続し、過去と現在の人間同士の連鎖の感覚を私たちに喚起するとうたわれる。月が移動し朝になり目覚めた子供は、日中という時間が実は死者の存在に満ちたものであると知らなければならない。

Moon moves to seek that empty pillow, a hemisphere away.  
Here, then, you will wake to the day.  
Those who died, died long ago,  
Faces you will never know,  
Voices you will never hear—  
Though your father heard them in the night,  
And yet, sometimes, I can hear  
That utterance as if tongue-rustle of pale tide in moonlight:  
*Sleep, son. Good night. (CP 132)*

最終行がイタリックで強調されているのは、ふたたび夜が来て息子に「おやすみなさい」と呼びかける声が死者からの声到他ならないことを示し、現実を死者が取り巻いているという認識をここで念押しするためである。

“Ballad of a Sweet Dream of Peace” は、軽い幻想的な夢を題材にした5つの比較的短い詩による連作である。このなかで、“all Time is a dream, and we’re all one Flesh, at last,”(136) であると語られる、連鎖の認識を宣言する一節がある。この言葉は、「外で餌をあさる豚に声をかければ驚いて飛び上がるだろう、なぜならそれは遠い昔にあなたが育てて食肉として出荷された豚と同じなのだから」という夢をばかげたものとしてかたづけようとした “you” に対しての返答である。「あらゆる『時間』が夢である」というのは、“Lullaby: Smile in Sleep” で考察したように (“For you now dream Reality.” (CP 128))、夢の現実性が示されていた以上、“Time” はすぐれて現実的性格をもつと Warren がとらえていること解釈できる。また、個人が究極には「ひとつの肉体」として一体であるとも語られる。つまり、すべての人間を支配する “Time” は現実性を帯びた理想として人間同士を統合していると、語り手は認識しているのである。

“Lullaby: A Motion like Sleep” では、先の詩でも扱われた、個人のなかにおける時間という概念が検討される。ここで語り手は、時間は円環的構造をもち、それが人間の内部で循環しているという認識を示す。この詩集には、「眠りなさい」と子供に呼びかける詩が多い。この詩にうたわれるように、Warren の認識では、眠りとは単なる眠り以上の、内的時間の流れの比喩となっているからである。

Sleep, for sleep and stream and blood-course  
 Are a motion with one name,  
 And all that flows finds end but in its own source,  
 And a circuit of motion like sleep,  
 And will go as once it came.  
 So, son, now sleep

Till clang of cock-crow, and dawn's rays,  
 Summon your heart and hand to deploy  
 Their energies and know, in excitement of day-blaze,  
 How like a wound, and deep,  
 Is Time's irremediable joy.  
 So, son, now sleep. (CP 141)

“Time” は理想として神格化されるようなものではなく、ときに人を傷つけるような残酷な性格も併せ持つことが、“wound” “irremediable” という単語が “joy” とオクシモロニックに結びつけられて示されている。この手法は、ニュー・クリティックとしての Warren の性格をうかがわせるが、それ以上に、両義的な性質をもつ “Time” が支配する現実の複雑さを描写するものである。ゆえに、心身の全力を尽くして立ち向かう必要を語り手は子供に呼びかけている。さらに、個々人は血液の循環のごとく時間の循環を自らに内包し、毎晩眠りを繰り返す以上、“Time” の意味を考える苦闘は生きている限り続く。こうして、“Time” は円環的に個々人を結びつける普遍性を有していると、読者に理解されるのである。

詩集の最後に置かれた “The Necessity for Belief” では、それぞれ Rosanna と Gabriel に捧げられた詩群の内容を暗示する太陽と月とが提示され、これまでの詩集の内容が集約される。



The sun is red, and the sky does not scream.  
The sun is red, and the sky does not scream.

There is much that is scarcely to be believed.

The moon is in the sky, and there is no weeping.  
The moon is in the sky, and there is no weeping.

Much is told that is scarcely to be believed. (CP 142)

「叫ぶことも泣くこともない」という静謐な世界は、自らの信念を語りつくし、この詩集で重ねる言葉は皆無であるという詩人による宣言に他ならない。「ほとんど信じられないことがたくさんある」を受けて「ほとんど信じられないことについて多くが語られている」という表現は、*Promises* における “Time” をめぐる神秘的な論理を交えた議論は、読者としてはにわかに信じられないものかもしれないが、この詩集はそうした内容について多くが語られているという、詩人からの自己言及的なメッセージとして解釈できるだろう。Warren にとって詩と神秘性とは、“poetry is the little myth we make” (*Brothers* xiii) と述べていたように、不可分の関係にあると認識されていたからである。

## 結論

“Time” をめぐる自己言及的な瞑想が展開する *Promises* は、伝記的事実を大胆に取り入れた枠組みを出発点にしながらも、時間軸と空間軸で重層的に個々人を結びつける “Time” の定義を模索することで、自伝性の普遍化の試みがなされた Warren の最初の作品である。その際に彼がもっとも切実に意識していたのは、死者を介しての人間の連鎖の感覚の必要性に他ならなかった。未来の「喜び」に至るためには、普段の現実の背後に潜む過去の累々たる死者たちの存在を感得することが不可欠であると彼は認識していた。Warren はそれを自身の過去の経験の再解釈や子供への語りかけの枠組みのなかで、「月」「眠り」あるいは直接に「死」という伝統的モチーフを用いて具体的に表現し、自伝性を超える広がりを与えようとしていたのである。個人的エピソードを始点に人間同士の有機的連鎖の感覚を基礎づける “Time”

という普遍的価値観の確立をめざした *Promises* は、文学作品の美的要素のみを強調し外在性を排除したニュー・クリティックの一員としてのイメージだけではとらえきれない Warren の姿を、私たち読者に示している。自身の経験を核にして広い現実世界に向き合う Warren の、文人としての新たなる自己の確立にむけての思索の苦闘が、*Promises* に吐露されているといえるだろう。

### 註

1. *All the King's Men* の時間意識を、自伝性を踏まえつつアメリカ南部文学の系譜のなかに位置づけたものとしては、Gray や Murphy の研究がある。しかし、Warren 文学の批評は、詩と小説とを分けて論じる傾向がきわめて強く、小説に表された要素が詩ではどのように展開したかという研究は少ないといえる。
2. Rosanna と Gabriel それぞれに捧げられた詩の数とテーマには、明らかな差がみられる。こうした扱いについて議論する余地があるが、本論では立ち入らない。公刊された文献に依る限り、Warren 自身は、この点についてインタビューや書簡で何も触れていない。
3. Corrigan, Justus の批評がこうした見解をとっている。
4. 引証に際し、*The Collected Poems of Robert Penn Warren* を CP と略記する。

### 引用文献

- Blotner, Joseph. *Robert Penn Warren: A Biography*. New York: Random, 1997. Print.
- Burt, John, ed. *The Collected Poems of Robert Penn Warren*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998. Print.
- Clark, William Bedford. *The American Vision of Robert Penn Warren*. Lexington: UP of Kentucky, 1991. Print.
- Corrigan, Lesa Carnes. *Poems of Pure Imagination: Robert Penn Warren and the Romantic Tradition*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1999. Print.

Gray, Richard. *The Literature of Memory: Modern Writers of the American South*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1977. Print.

Hendricks, Randy and James A. Perkins., eds. *Selected Letters of Robert Penn Warren Volume Four: New Beginnings and New Directions, 1953-1968*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2008. Print.

Koppelman, Robert S. *Robert Penn Warren's Modernist Spirituality*. Columbia: U of Missouri P, 1995. Print.

Murphy, Paul V. *The Rebuke of History: The Southern Agrarians and American Conservative Thought*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001. Print.

Warren, Robert Penn. *All the King's Men*. New York: Random, 1946. Print.

———. *Brother to Dragons: A Tale in Verse and Voices*. New York: Random, 1953; rev. 1979. Print.

———. *Democracy and Poetry*. Cambridge: Harvard UP, 1975. Print.

———. “Poetry Is a Kind of Unconscious Autobiography.” *The New York Times Book Review* 12 May 1985: 9-10. Print.

———. *New and Selected Essays*. New York: Random, 1989. Print.

Watkins, Floyd, and John T. Hiers, eds. *Robert Penn Warren Talking: Interviews 1950-1978*. New York: Random, 1980. Print.

———. *Then and Now: The Personal Past in the Poetry of Robert Penn Warren*. Lexington: UP of Kentucky, 1982. Print.

木村敏 『時間と自己』 中公新書, 1982年.